



砂に足を取られて起き上がれなくなってしまうだろうと思ひ、迫りくる風に耐えながらどうにか写真を撮り終えた。サイトの火入れは夜の7時から…。それまで8時間以上をどこか別の場所で潰さねばならなかった。びしょ濡れの服と靴に体は冷え切り、凍えて氷像にでもなってしまうそうだった。私は喫茶店と食堂を探し、そこで濡れた服を乾かして冷えた体を温め、サイトの火入れが始まるのを待つことにした。大雪で電車が運行しているかどうかもわからなかった。それ以上に不安だったのは、サイトに火を入れ、その火で団子を焼く人々の姿を見ることができかどうかまったく予想がつかないことだった。しかし、時間通り7時になると、サイトの火入れが始まった。それまでの不安と凍てつく寒さが、一瞬のうちに煙の中へと消えて行くようだった。サイトを燃やす左義長に続いて、綱引きや海中での遊泳、厄払いの儀礼が行われ、歌も捧げられた。海岸では多くの人々が団子を火に翳して焼き、それを分け合って食べていた。皆、顔に微笑みを浮かべながら、長い長い一日を終えたのだった。こうした時間の中で垣間見ることのできた人々の強い愛情や友情、そして故郷に対する思いといったものは、私の心にも深く刻み込まれることになった。この左義長とは、新たな年を迎えるために行われるもので、人々はありとあらゆる怖れと不吉なものを炎の中に込めて燃やし、新年の到来を待つのである。

日本で二番目に訪れたのは、名古屋にある日本独楽博物館だった。新幹線での移動となったが、そのスピードに圧倒された。窓からは、富士山を眺めることもできた。名古屋港近くにある建物の2階が、私立博物館となっていた。私たちがそこを訪れた時、館長は真剣な面持ちで子供たちに様々な遊びの方法を教えている最中で、大きな声を張り上げながら説明をしているところだった。

博物館の中には、凧や独楽、空中独楽など10万点近くの収蔵品が所狭しと並べられていた。そこには、中国や台湾、ヨーロッパ、オーストラリアの空中独楽などが揃えられており、「輪鼓」と呼ばれる日本の空中独楽までもが展示されていた。午後の1時半になって手が空くと、館長は昼食を摂りながら私たちに自らがこれまでに歩んできた半生について語ってくださった。

午後3時になると、館長は再び子供たちに遊びを披露して見せるために食堂を後にした。話を伺うことのできた時間は短かったのだが、館長の語りからは、子供たちに対する彼の愛情と信頼とが伝わってきた。彼は、子供たちに健康で自信に満ちあふれた生活を送ってほしいと願っているという。彼によれば、遊びとは失敗を繰り返し、失敗を通して自信を取り戻すという過程にほかならない。これこそが、遊びのもつ力なのである。

こうした館長の眼差しからは、文明によって失われてしまった子供たちの想像力と、幼い心から生まれる意志や信念といったものを守り続けていきたいという彼の想いを読み取ることができる。この想いのために、彼は博物館という小さな空間の中で近所の子供たちと遊びに興じるのだ。彼が子供たちと遊ぶ様子を見ながら、私の心にも幼い頃の思い出が蘇り、悲しみにも似た気持ちが湧き上がってくるようだった。70歳と高齢の館長が自ら遊びを企画し、顔をほころばせながら子供たちと遊ぶ様子には、本当に頭が下がる思いだった。

今回の訪問期間は決して長いものではなかったが、私に多くのことを経験できるよう配慮してくださった非文字資料研究センターのスタッフと、指導を引き受けてくださった先生方に心より感謝を申し上げたい。次の機会に日本を訪れる際には、外国からの「お客様」などではなくってほしいと願いながら。

日本で陶芸を学んでいる、 または陶芸に従事している外国人

Liliana Granja Pereira de Morais
(サンパウロ大学)



本研究の目的は、日本で陶芸を学んでいる、または陶芸に従事している外国人を探してインタビューし、彼らの談話の中から日本文化が陶芸を通じてどのように表されているかを理解することであった。故郷を離れ日本で陶芸の道に進もうと思った動機を理解するため、私は外

国人陶芸家たちのライフストーリーに関心を持った。また、日本のスタイル、技術、さらには日本人のものづくりに対する精神が、どのように彼らの陶芸作品に影響を及ぼしているかについても知りたかった。これらの目的を達成するため、ライフストーリーのエスノ社会学的手

法 (Daniel Bertaux¹, 1997) に従った質的インタビューを実施し、スチュアート・ホールの文化表象理論 (Stuart Hall², 1997) を主な理論的背景として利用した。

私は日本で活動する外国人陶芸家 20 人を特定し、そのうちの 9 人とインタビューの日程を組むことができた。6 人 (レジーナ後藤: ブラジル、アンドリュー・ゲムリッチ: 米国、マシュー・ソヴァニ: 米国、ダグラス・ブラック: 米国) 以上 4 名は益子にて; ユアン・クレイグ: オーストラリア-水上町にて; スティーブ・トゥーテル: 英国-東京にて) とは直接会ってインタビューを行い、3 人 (ヘスアルド・フェルナンデス: スペイン-益子在住; カリーナ・ハマグチ: ブラジル-高知在住; ムピンディ・キブデ: ウガンダ-東京在住) とは E メールでインタビューを行った。上記のように、直接会って行ったインタビュー 6 件のうち、4 件は益子で行われた。またインタビューには至らなかった陶芸家もそのほとんどが益子または笠間に住んでいた。この 2 つの地域に陶芸家が集中しているのにはさまざまな理由があるが、その 1 つに、両地域が首都東京に近く、東京が日本で最大の陶磁器製品の購入市場であることが挙げられる。両地域は首都の近くにありながら、依然田舎と見なされている。そうした環境では陶芸家は制作に必要な原料を直接調達することができ、都市部では認められない大型の薪窯を作ることもできる。

笠間焼の生産は江戸時代に始まり、近隣の益子にも大きな影響を及ぼした。しかし 1920 年代に始まった民芸運動と人間国宝の濱田庄司が益子に工房を建てたことで益子焼の評価が高まった一方、笠間焼は衰退していった。1957 年に茨城県がデザイナーと陶芸家の招致を開始し、地元の陶芸品生産を奨励するようになってようやく、笠間には日本の他地域や海外から陶芸家が集まり、活動の拠点を置くようになった。こうした経緯があるからこそ、笠間の陶芸の中心地は、あらゆる人々に開かれており、笠間焼のみならずあらゆるスタイルを受け入れているのである。益子にも同様のことが言える。濱田庄司が英国の陶芸家バーナード・リーチと強い結び付きを持ち、セントアイブスのリーチ工房との関わりが深かったことから、益子には外国人との交流が盛んに行われた歴史があり、日本および海外のさまざまな地域から陶芸家を惹き

つけている。

インタビューにあたっては自由回答式質問を 16 問用意した。そのうちの 3 問には、インタビュー어의回答に共通性が見られ、本研究に非常に重要な結果をもたらした。私はそれらの回答を分析し、日本の陶芸および文化に関して、外国人陶芸家の談話と活動の中に見られる共通点を特定した。以下の通りである。

- ・日本では陶芸が芸術として認められている。これは欧米では陶芸が単に工芸と見なされているのと対照的である。
- ・日本では、人々は陶磁器の機能と用途を非常に重視している。
- ・日本人は欧米人以上に手作りの製品に価値を置いている。
- ・日本の陶芸家は作品に地域の原料を使っている。
- ・日本では、食べ物、季節、陶磁器に密接な関わりがある。
- ・日本人は自然をより身近に感じている。それは陶磁器作りにも反映されており、自然は陶磁器作りの過程の一部となっている。
- ・日本には、単純性と不完全性に価値を置く美意識がある。
- ・日本では、陶芸を学ぶ過程は欧米よりも厳しく、長期間に及ぶ。
- ・日本人陶芸家は、制作の過程を結果と同等に重視する。
- ・インタビューした陶芸家のほとんどが、高温の薪窯と灰釉 (はいぐすり) の技法を使っている。
- ・彼らのほとんどが、自然を主要なインスピレーションの源としている。
- ・インタビュー者の大半が、陶芸についてほとんどのことを日本で学んだ。
- ・彼らのほとんどが日本人の配偶者を持っている。
- ・彼らの大半が 1990 年代初頭 (バブル経済の頃) に日本にやって来た。

この調査から私は、インタビューから得られた共通の回答は、日本の伝統工芸および文化に関して、特に明治維新 (1868) 後に創り出された慣行化したディスコースの産物であるという予備的結論を導き出した。このディスコースは、明治時代以降および戦後、日本が自らを近代国家と認める必要から生み出されたもので、エリック・ホブズボームの言う「創られた伝統」(Eric Hobsbawm³, 1983) の概念と日本人論を包括しており、日本の伝統工芸の表現に反映されている。しかしながら、この問題を発展させていくためにはさらに深い研究が必要であろう。

³ エリック・ホブズボーム イギリスの歴史家。Eric John Ernest Hobsbawm, *The Invention of Tradition*, co-edited with Terence Ranger, Cambridge University Press, 1983 (『創られた伝統』)

¹ ダニエル・ベルトー フランス国立科学研究センター名誉研究ディレクター。フランスの社会学者。

Daniel Bertaux, *Les recits de vie: Perspective ethnosociologique*, 1997 (『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ』)

² スチュアート・ホール ジャマイカ生まれのイギリスの文化理論家。カルチュラル・スタディーズの代表的理論家。

Stuart Hall, ed., *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Open University, 1997. (スチュアート・ホール編『リプレゼンテーション—文化的表象と意味作用の実践』)

英語、中国語でいただいた招聘レポートは、事務局で日本語に翻訳させていただきました。